2日目 第五部

総　括

平成23年3月11日(金)
於・シーサイドホテル舞子ビラ神戸

川本皓嗣 学長

みなさんお疲れ様でした。最後に高らかにラッパを吹き鳴らすつもりでしたが、今のアンケートの結果を見て、ちょっと力が抜けました。とはいえ、これはこれで先生方の現状認識とバランス感覚を映したお答えなので、しっかり受け止める必要があります。

恒例となった大手前大学の宿泊研修。私は今回も非常に良かったと思っています。周囲を見渡しても、こんなことがやれている大学は、ほとんどなさそうです。いま本学が入学者の定員をなんとか確保できているのも、こうした努力の積み重ねのお陰でしょう。

もちろんすべてがうまく行っているわけではありません。まだまだやるべきことは沢山あるし、みなさんの考えもばらばらです。それをまとめるだけでも大変ですが、以前のことを振り返ってみると、いまはずっといい状態になったと思います。初めての合宿研修は淡路のウェスティンでやりましたが、まだ全員参加というには程遠く、帰りに明石大橋を渡って舞子の駅に着いたとき、雪が降って強い風が吹いていました。あのときの寒い心細い気持ちを思い出します。

今回は先生方もどんどん意見を言って、積極的に参加してくださいました。特に今日、ここで座長をつとめられた中野先生。尼崎市議会で知る人ぞ知る中野教育委員長の腕のほどを、まざまざと拝見しました。中崎先生も、以前とはうってかわって、テレビ番組のホストのように落ちついて、穏やかに、しかもてきぱきとやっておられて、感心しました。他の先生方も、皆さん失礼ながら、プレゼンテーションがお上手になったし、総体的にコミュニケーション能力も上がっています。そして、チームワークがどんどん固まってきたと思います。

だから昨日と今日をご一緒して、あきらかに大手前はより良い大学になってきたし、将来もっと良い大学になる土台が築けたかと思います。定員を割る大学が多いなか、今年の入学者は定員の1.1倍強です。これも教職員の皆さんの絶え間ないご努力、ご工夫の賜物です。一方、出口、就職率のほうはいかんせん全国平均を大きく下回っているわけで、これは大問題です。昨日もお話があったように、今後は徹底した情報公開が求められています。以前は入学者の数と就職者の数を公表する必要はありましたが、あいまいな部分もありました。たとえば就職率を算出するのに、就職者数を在学者数で割るのではなく、就職希望者数で割るというやり方も、大目に見られていました。

この就職希望者数というのは、「希望」という主観的な要素が入るだけに、かなりファジーな数字です。これはただの噂ですが、学校によっては、就職を希望していた学生でも、それがうまく行かなかった場合は、希望者の数から外すという手を使うところもあったようです。冗談ですが、極端にいえば、就職に成功した学生だけが就職を希望した―落とされた学生はもともとそんな会社への就職を希望していなかったと考えると、就職率は100%になるわけです。そういう噂も聞きましたが、これからは、そういう操作はできなくなります。在籍者全体に対して就職者は何人と、はっきり数字に出して公表することが義務づけられます。すべてが丸見えになる、きびしい時代になりました。もちろん大学は専門学校ではないので、就職率がすべてではありませんが、いかにいい大学でも、いかにいい教育をするといっても、高い学費を払って、就職率の極端に低い大学に、保護者が子弟を送る気になるでしょうか。

これまで皆さんには、教育改革をやるのは大学が生き延びるためだと何度も訴えてきました。とはいえ本当は、何よりもまず、大手前で学ぶ学生たちのためです。学生がこれからの社会でしっかり生きていけるように育て上げる、教養と知性と行動力を身につけさせる、それが第一です。ランクづけで言えば、大手前はほぼ中程度の大学ですが、だからといって、中途半端な人間を世に出していいというわけではありません。入試段階でうちを志望するクラスの学生たち、なかには自信のない、あまりやる気もない学生もいるでしょうが、ともかくそうした教え子たちを、しっかり一人前の「大学出」に鍛え上げ、社会に送り出すことは、われわれ教職員が与えられた、そしてみずから引き受けた、最大の義務ではないでしょうか。

大西先生のお話にもありましたが、入社試験の面接などでは、できる人間かできない人間かは、ほとんど一目で見分けがつくそうです。どんな目つきで、どんな挨拶をするか。どんなヘアスタイルで、どんな服を着ているか。どんな姿勢で、どんな受け答えをするか。そうした場面で、一目でこれは良しと認められるような学生を、送り出し続ける義務がある。

今後の世界では、国内ばかりではなく、国際的な競争がたいへんです。一部の学生たちに見られるように、まだ少しは経済的に余裕のある保護者の庇護のもとで、なるべく嫌なことはやりたくない、やる自信もない、どうせ誰かがやってくれるだろうといった、甘ったれた態度では、国際的な商談一つまとまらないでしょう。これまで比較的豊かだった分、日本は周囲の国々から虎視眈眈と狙われています。いまはトップの業界でも、安閑としてはいられません。産業や貿易においても、政治や外交においても、日本よりはるかにしたたかな国々と、対等以上にやり合える強く賢い人間を、われわれは必死で育てる必要があるのではないでしょうか。

いま全学で推進しているC-PLATSについては、先生方がすでに納得されて、これなら何とかやれそうだと思っておられる部分と、なんだか不安、あるいは不審に思っておられる部分があるようです。その不安の部分についてですが、以前にも申し上げたように、先生方がC-PLATS、つまり社会人基礎力をすべて身につけておられるとは、かならずしも想定していません。私自身をも含めて、大学の教員がすべての面で卓越した社会人であるとは、誰も思わないでしょう。また、かならずしもそうである必要はありません。これについては、二つの点を指摘したいと思います。

その第一点は、これまでにもたびたび申し上げたように、われわれ教員の誰にも、またその担当するどんな授業にも、C-PLATSのいくつかを鍛え上げるのに適した面があります。先生方には、専門を通じて得意とされる分野がいくつもあるでしょう。いちいちくわしくは申しませんが、論理的思考、分析、計画、創造性、コミュニケーション、プレゼンテーション、リーダーシップ、行動、そしてチームワークや社会的責任感など―誰がどの授業を受け持つにせよ、そこで特に力をつけさせることのできる要素がいくつかあります。ただ肝心なのは、どの力をどのように伸ばすかを考え、意識的に授業のやり方、組み立て方を工夫することです。

そしてもう一点ですが、これについては、ちょっと過去の経験をお話しします。私は平成2年から9年にかけて、中学校の英語教科書の編集・執筆にかかわっていました。その時に見聞きしたことですが、当時はちょうど、中学校の教室に若いネイティヴの先生方を導入するという試みが始まったころです。たしかAETと呼ばれて、まだそれは続いていると思います。あのとき初めのうちは、現場の先生方が猛烈に反対したんです。そんなものは意味がないし、授業の進行に支障をきたすと。つまり、そんな余計なことをしていては、高校受験に必要な英語の知識を授ける時間が足りなくなるというわけです。

理屈はいろいろあったのですが、その本音は何かというと、要するに自信がないのです。ネイティヴに教室に来られると、生徒の前で下手な英語を話さなければならない。自分のまずい英語を聞かれたり、下手をすると、話が分からなくて立ち往生さえしかねない、それを恐れていたんですね。ところが実は、先生がたが心配などする必要はぜんぜんなかったのです。というのは、当時の先生がたは不幸にして、外国に行くチャンスもめったになく、あまり英語の発音がうまくなかったかもしれません。しかし、中学生のほうは若いので、すぐネイティヴの英語に馴染み、「外人」にも親しんで、らくに聞き分けもするし、発音も上手になります。もちろん、それで日本人の先生の仕事がなくなるわけではなく、教えるべきことは、文法を初め、ほかにいくらでもあります。

つまり、学生たちに学ばせ、身に付けさせることを、先生自身がすべて完備し、体現する必要はない。コーチが選手に教えることを、すべて自分でやれる必要はないのと同じことです。もしできるのなら、まだ選手のままでいることでしょう。問題は教え方、鍛え方―知識と経験にもとづいて、学生をどのように育て上げるかです。C-PLATSについても、まったく同じことが言えるのではないでしょうか。先生がた

がそれぞれの授業で、これなら自信をもって教えられるというものをきちんと教え込めば（というより、学生たちに自分で養わせれば）、個々の学生は、それらさまざまな授業で試された能力や知識をどんどん取り入れ、身につけて、やがては自分のなかで、C-PLATSのすべてを多かれ少なかれ具備することになるでしょう。

ゆうべは、各部会で出た意見を集約して付箋に書き込み、それを舞台上の白板に張り付けて、それぞれの部会の代表が報告するということをやりました。司会は山下先生と坂本先生でした。皆さん即興で、少々戸惑いも見られましたが、それを聞きながら、本当にいい先生がただと感じました。一方、今朝は昨夜の部会別の議論、かなり熱の入った長い議論の報告で、報告者の先生がたは、さぞご準備がたいへんだったでしょう。朝の4時までかかったという方もおられます。ここでは論点がきちんと整理され、あざやかにパワーポイントに仕上げられて、どれも見事な発表でした。まとめ方、話術、笑いまで誘うプレゼンテーションが、非常に良かった。これはたぶん、これまでのベストではないかと思います。その後の議論も活発でした。

また、PBLで鍛えられる能力、ことに研究成果の発表・プレゼンテーションの能力についてですが、多種多様なツールを使わせるといういいアイディアが出ましたね。PBLの成果を発表するのに、もちろん言葉やパワーポイントはきわめて大事ですが、それ以外にも各学生の得意な分野、たとえばマンガとか絵とか音楽とか、あるいはオブジェとか生け花とかダンスとか、またアニメとか歌とか、紙芝居とか写真とか絵巻物とか、何でもいいわけです。それぞれに得意なもので工夫させればいいでしょう。

最後に、評価のしかたについて重要な質問がありました。内部評価・外部評価を含めて、評価の客観性をどのように保証するのか。もちろん、評点を成績につけるとか、卒業要件に加えるというのとは、まったく別問題です。大切なのは、個々の学生本人が、自分がだんだん力を付けてきたことを実感し、自信をもつようになることです。これから各能力のファカルティ・ミーティングなどで、突っ込んだ議論が行われることでしょうが、この道の立派な先輩であるアメリカのアルヴァーノ大学の知見を学ぶ、お知恵を頂戴することも大切ですね。誰が、どんなやり方で、何をどの程度精密に評価しているのか、その結果をどのように活用しているのか。そして、そうした努力はどのような効果を生み、学生たちの将来にどのように生きているのか。ぜひ教えていただきたいところです。

実は、7月2日に大手前大学はアルヴァーノ大学と正式に協定を結ぶことになっています。初めうちの理事長がアメリカへ調印に行かれるはずだったんですが、逆に向こうの学長と副学長が来てくださるそうです。向こうにとっては、大手前は「ういし」大学であるらしい。アルヴァーノには毎年、世界中から何百校も研修にやってくるけれど、そこで学んだことを本当に実践できている大学は、日本やイギリスはおろか、アメリカでもめったにないそうです。いろんな障害があって（ことに学部間の意見の相違ですね）、なかなか実行に移せないと。それを大手前大学が、独自のアイディアや工夫を取り入れながら、どんどん前に進めている。だから大手前にはたいへん好意と興味を示してくださって、今年はあちらから調印に来られるわけです。7月2日にはセミナーが開かれます。1日に調印して、2日に大手前でセミナーをやりますので、どうぞ参加いただきたいと思います。

合宿研修の2日間、まことに御苦労さまでした。先生がた、職員の方々、さぞお疲れのことと存じます。今夜はどうぞゆっくりお休みください。本当にありがとうございました。